

三浦梅園の経済思想の現代的意義

エンデの遺言に触発されて

小川 晴久（東京大学教養学部教授）

1. 価原の再発見

生涯宮仕えせず自然の探究に一生を捧げた18世紀の哲学者三浦梅園（1723～1789）に『価原』という経済論がある。明治末年に河上肇や福田徳三によってその貨幣論が注目されて以来、価原は経済学の書物として高い評価を受けてきた。

十数年前から地球規模の南北問題や環境問題にとりくんできた私は、これからはGNP（GDP）を意識的に減らしていく以外に地球の生態系を守ることはできない、南の価値を再発見し、農業や手工業を回復することなしに自立はありえない、という結論に達していた。このような私であったから、貨幣経済の浸透を鋭く活写し、ヨーロッパにも通用する貨幣論を確認するというような従来の価原理解は正しくないと考えようになり、三年前高崎経済大学で開催した第22回梅園学会で「価原の再発見」と題して以下のことを明らかにした。

経済には二つの対立する形態がある。乾没^{かんぼつ}と経済である。乾没は相手から富を吸いあげる意で、「利をもって利とする」商賈^{しょうが}（商人）の術、経済は経世済民^{けいせいすくじん}（世を^{あき}経め民を^{すく}済う）の意で、「義をもって利とする」王者の道である。乾没は今日の意の経済（エコノミー）、経済は政治経済学（ポリティカル・エコノミー）＝福祉に当る。梅園が今日我々が当り前のこととしている経済を乾没という言葉で理解していたことに注意。そして経済という言葉は当時は経世済民以外の意味では使われていなかったことにも。この二つの形態があることを前提にして、梅園は価原で次の三つのことを強調した。

- (1) 豊かさはお金ではなく、水火木金土穀の資源（民用）にあること。また民が豊かであること（民富）が国富であること。
- (2) したがって為政者は民富につとめなければならず、富を自分の手元に吸い寄せようとする商人の術、すなわち乾没の手法を用いてはならないこと。国や天下を治める方法は、いつも経世済民の方法でなければならぬこと。
- (3) その上で廉恥^{れんち}礼讓^{れいじょう}の風を興すこと。

廉とは欲がないこと、利を人に推すこと。礼讓とは人に譲ること。

これは争奪とは反対の態度である。人に譲るとは、目上の人に譲る、弱者に譲る、自分よりもふさわしい人に譲ることである。そのためには衣食が足りなければならない。梅園は礼楽制度を作らねばならぬと言っているが、この制度は恥の感覚と譲るという精神の二つを根幹とする。

私は三年前の時点で佃原からこのようなことを学び、それを現代に生かさねばならないと考えていた。ところが、この佃原理解の正さを立証し、かつ強力に後押ししてくれる契機と昨年出会ったのである。「エンデの遺言」との出会いである。

2. 「エンデの遺言」の契機

私にとっての革命的啓蒙

昨年五月NHKテレビは「エンデの遺言」という1時間のNHK特集を放映した。この内容は今年二月NHK出版より同名で単行本になり、今静かなブームをおこしている。

この番組は次の二つのことを教えてくれた。

- (1) 利息のつかない貨幣を作ることは可能であること、否、それ以上に時と共に価値が下がる（劣化する）貨幣を作ることは可能であること スタンプ貨幣のように。
- (2) 貨幣は誰が発行してもよく、しかも目的に応じて何種類あってもいいこと。

貨幣を本来の機能である交換手段に絶えず戻し、貨幣から絶対的権力を剥奪すること その具体的方法として自由貨幣＝地域通過というものがあることを「エンデの遺言」から知ったことは、私にとって巨大な意味をもっていた。資本そのもの、また資本主義社会そのものに風穴をあけるに等しい理論としてシルビオ・ゲゼル（1862～1930）の自由貨幣の理論を私は受けとめた。「エンデの遺言」制作者の一人、森野栄一氏から自由貨幣理論の先駆者にボアギュベール（1646～1714）がいたことを知ったことは、もう一つの驚きであった。

3. ボアギュベールとの出会い

そして梅園の貨幣論との酷似に驚く

フランスの古典経済学の祖ボアギュベールの貨幣論と三浦梅園の貨幣論の比較は、1910年福田徳三が行なっていた。私はそれを承知していたが、ボアギュベールへの関心は湧かなかつた。ところが今回「エンデの遺言」の洗礼を受けて（地域貨幣論を媒介にして）私は無性にボアギュベールを知りたくなった。だが驚いたことにボアギュベールの作品の日本語訳、それに英訳すらないのである。代表作「富、貨幣、租税の本性についての論究」を原文から無理して読みといてみて、その貨幣論を次の四点にまとめてみた。

三浦梅園の経済思想の現代的意義（小川）

- (1) 真の富は貨幣にはない。それは生活財と我々の生に喜びと潤いを与える一切の物にある。
- (2) 貨幣は有益な貨幣（交換手段）と犯罪的貨幣（利殖の手段）の二つがある。後者はすべての物の処刑者である。
- (3) 貨幣はスマートに犯罪を犯す。しかし一度も司直の手にかかったことはない。
- (4) 貨幣は多量に存在する必要はなく、多く回転させればよい。また紙幣にても可。

三浦梅園の価原の内容と八割以上同じである。ポアギュベールの貨幣論を知ると価原の内容がより鮮明になる。また二人が貨幣の支配といかに断乎として闘ったか、その意図も熱く伝わってくる。

貨幣経済の発達を社会発展の尺度と考える考え方を再考しなければならない。エンデの『モモ』、トルストイの『イワンのばか』を我々は繰り返し読まなければならない。『モモ』は時間の大切さを、時は金なりとしてではなく、時は生命だと言う意味で説いている。『イワンのばか』は農業の大切さ、肉体労働（からだを動かすこと）の大切さを説いている。頭を使い、時間を節約していくことが、私たちにこのようなせわしい生活をもたらしていることを考えるとき、この2冊の古典を私たちはバイブルのように日々読む必要がある。お金への隷属から少しでも脱却するためにも。



平成12年7月10日 於 附属図書館ホール